八幡 門前自治会がある地区の歴史小話（令和４年８月）　　回覧

１２．八幡から江戸・鎌倉への道

【中世】

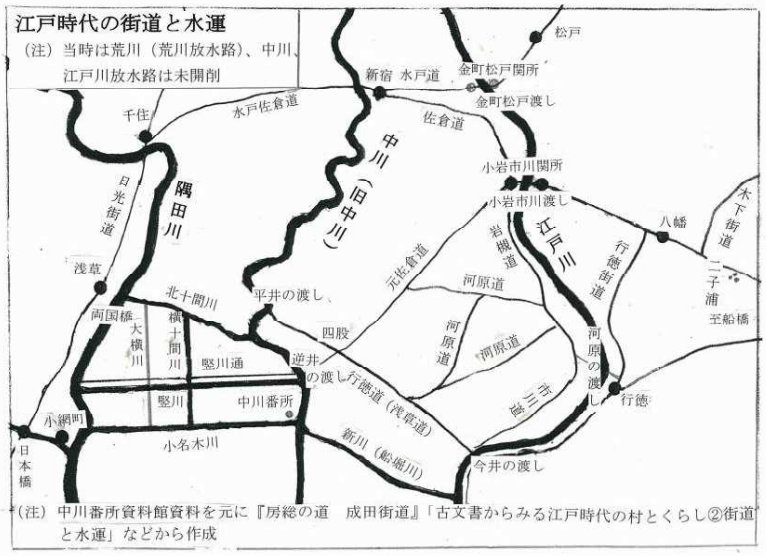
国道 14 号は、奈良・平安時代は**東海道**（771 年以降。それまでの千葉県への東海道は相模国走水と上総国富津を結ぶ海路）であった。

鎌倉時代には、市川砂州の東、下総台地が海に入り込む地の二子浦（14 号沿いで、当地から約 2 km強先）の船着場が機能していて、日蓮上人が横浜市金沢区の六浦まで乗船し、朝比奈切通から鎌倉に入ったとの言い伝えがある。鎌倉へは海路も便利だった。

【近世】

江戸期には日光街道が千住で脇往還の**水戸佐倉道**を分岐、次ぎに葛飾区の新宿で分かれて**佐倉道**として、小岩市川の関を経て、房総の大名の参勤交代の道となる。

江戸の中心からは竪川沿いの道を通り＜逆井の渡し＞で旧中川を渡り、小岩市川の関所に向かう**元佐倉道**や、＜平井の渡し＞から**行徳道**として江戸川の＜今井の渡し＞を経由する道、また、それぞれの道から分岐して江戸川を＜河原の渡し＞で渡る道なども生まれる。



佐倉藩は千住に一度北上するより、＜逆井の渡し＞から元佐倉道で小岩市川の関所に向かうルートを希望したが、祖法重視の幕府には毎回の申請が必要だった。

水路も重要で、**行徳の塩**を安全に運ぶ為に東西を通じる運河の小名木川、新川（舟掘川）が江戸初期に開削され、行徳河岸から日本橋小網町までの水上の道が確立した。その行徳船は旅客も運び（約 13 kmの行程で 1 人 50 文、1 両 40 万円の現在価格換算で約 3500 円）、江戸後期に流行した成田参詣、三社巡り（鹿島神宮、香取神宮、息栖神社）の旅人で賑わった（往古は人は陸路、貨物は水運が基本で、江戸川も関宿で利根川とつながり、小名木川・新川を経由するルートは**内川廻し**と呼ばれ、栄える）。

なお行徳からは、市川文化会館前を通り、八幡小に向かう道が**行徳街道**として使われた（成田参詣では、行徳から八幡を通らず田尻・二俣経由で船橋への道も活用）。

また鎌ケ谷の方からは、利根川河岸の木下から下総台地を通る**木下街道**（印西、白井、鎌ケ谷、八幡まで約 30 km強）が鬼越の先で佐倉道に合流した。銚子の海産物や鬼怒川沿いの産物も、八幡・行徳経由で江戸へ運ばれたのである。

すなわち佐倉道の**八幡宿**は、北東の木下街道、南西の行徳街道からの通行人が行き交う**クランク（鍵型）状の要地**であり、これもボロ市（別途取り上げる）隆盛の一因とも考えられる。また江戸中心地との距離の近さ（約 20 kmの半日行程で、途中に水路も利用可）も近郊農業（梨・桃も含めて）が発展した一因である。